

2004年度人文学研究所活動報告

講演会要旨

1. 講演会アジアにおける探偵小説の誕生

① 中国における探偵小説の受容

報告者：鈴木陽一 教授（神奈川大学）

② 上海と探偵小説報告者：潘 建国 教授（上海師範大学）

日 時：5月10日（月） 17:00～

場 所：17号館216室（人文研究所資料室）

※潘教授の発表は通訳付きです。終了後は懇親会を行います。

（主催 神奈川大学人文学研究所）

■ 内容紹介

共同研究奨励費のプロジェクト「東アジアにおける近代探偵小説の誕生」により、上海師範大学潘建国教授を招請し、講演会と座談会を行った。はじめに鈴木陽一が探偵小説研究の現状と、その研究の意義について簡単な報告を行った。ついで潘建国氏は、上海における探偵小説など通俗文学の隆盛が、印刷業の発展と密接な関係があること、特に作家はしばしば自ら出版社を経営しながら執筆活動を続けていたことを、近代上海を代表する作家包天笑を例に挙げ、その状況を具体的に明らかにした（報告題名「民国時期上海偵探小説期刊述略」）。しかし、氏によれば、近代文学、就中通俗文学についてはほとんど研究がなされてこなかったため、探偵小説がどのような雑誌に掲載されていたのかも未だ必ずしも明らかではなく、まず基礎的な作業、日本の樽本照雄氏（大阪経済大学教授、雑誌『清末小説』及び「清末小説研究会」主宰者）が行っている書誌からしっかりとやらねばならないという指摘があった。また、氏自身が古書店で買い求めた雑誌の中には、これまで書誌情報のない雑誌も含まれており、書誌の作業一つとっても、より大きなプロジェクトが必要であるということが参加者の共通した意見であった。今後、東京－横浜－上海を機軸とした近代の研究は、日中両国の文学、歴史研究にとっても、また本学にとっても重要なテーマとなるであろうことを予測させる、意義深い講演会であった。

2. ①中国雲南省の留学生と雲南現代社会について

講 師：紅帆氏（中国雲南芸術大学助教授）

②長崎唐館の社会構造について

講 師：彭浩氏（復旦大学大学院生）

日 時：5月19日（水）16:00～18:00

場 所：17-216（人文学研究所資料室）

（人文学研究所・人文学会 共催）

共同研究グループ

日中関係史

「大小さまざまな研究会活動を基本に据えたい」とした昨年の決意が、今年も生かせなかったのは遺憾である。決意の持ち越しとなる。

3回開いた講演会は以下の通りである。うち王選さんの分は報告書を書いているので、それを再録する。

(1) 04.5.19

紅帆氏（中国雲南芸術大学助教授，本学研究員）「中国雲南省の留学生と雲南現代社会について」，
彭浩氏（復旦大学大学院生，本学研修生）「長崎唐館の社会構造について」

(2) 04.9.24

易恵莉氏（華東師範大学教授）「私の近代日中関係史研究」

(3) 04.12.15

王選氏（731部隊細菌戦裁判原告団団長）「日本軍の細菌戦—中国浙江省被災地からの報告」

1937年から始まる日中戦争において、日本軍は731と称する部隊に毒ガス・細菌戦に備えた実験を行わせ、それを40年から使用した。講演ではその準備段階を紹介したあと、実際にペストの感染したノミを空中から散布して、その被害に遭った浙江省のいくつかの町の具体的な状況および最近被害者が日本の裁判所に謝罪を損害賠償を求める裁判を提起した状況を詳しく紹介した。

文化のかたち

1. 研究組織名「文化のかたち」研究会 (Cultures as Gestalt)

2. 研究会の開催

(1) 第1回研究会

開催日：2004年4月28日（水）午後1時～

会場：神奈川大学17号館3階談話室

テーマ：「今年度の活動方針について」

出席者：秋山，小馬，中本，水野，大須賀，佐藤，石井，湯田。

(2) 第2回研究会

開催日：2004年5月26日（水）午後2時30分～4時

会場：神奈川大学17号館2階人文学研究所資料室

テーマ：「叢書の編集方針と来年度の国際シンポジウムについて」

出席者：秋山，水野，石井，廣瀬，湯田。

(3) 活動内容

今年度の叢書刊行を目指して、そのタイトルを「新しい文化のかたち 言語・思想・暮らし」とし、9名の執筆者と共に具体的な編集方針を検討して、お茶の水書房から2005年1月下旬に刊行すると共に、2005度11月に、人文研究所主催の国際学術シンポジウムを「世界から見た「日本文化研究」—多文化共生社会構築のために>」のタイトルで開催することなどを協議した。

（代表者 水野晴光）

西洋文化の受容—思想と言語

1. テーマ：近代日本における西洋文化受容の総合研究
2. 代表者：高野繁男
3. 活動内容：5年間をかけて読み続けてきた『明六雑誌』の成果を、昨年度、本研究所叢書20号『「明六雑誌」とその周辺—思想と言語—』として出版した。その後、新たに近代初期の洋学資料を読む計画をもっているが、本年度は休会という状態であった。来年度は、再出版を期している。
(高野繁男)

物語研究会

1. 研究会の開催
 - (1) 第1回
開催日：2004年5月26日（水）
会場：17号館418室
テーマ：今年度の活動方針について
 - (2) 第2回
開催日：2004年10月27日（水）
会場：17号館418室
発表者：村井まや子「赤ずきんの内なる狼」

2. 活動内容

懸案であった構成メンバーが増えたこともあり、これなら活気ある研究の継続ができることをあらためて確認した。第1回の研究会では、とくに物語研究の領域における共同研究の成果について、これまでに刊行された著書の目次コピーなども配布して検討し、それらをもとにそれぞれが各自の研究領域についてコメントを加えた。第2回の村井氏の発表は、視点、方法、内容ともにじつに充実した発表で、議論が大いにもりあがった。次年度以降からは、外部から講演者を招くなどして、一層の活動の充実につとめたい。

(日高昭二)

各国地方史の比較的研究—新編中国地方志叢書を中心として—

1. 研究テーマ：世界史を現存する国家、民族、文明というレベルで考察するのではなく、地方史という狭い地域観念から見直すことを目的とする。年に4回の研究会を開き、各回、中国研究者と他分野研究者の二名の発表を行う。
2. 研究会の開催
 - (1) 第3回研究会 2004年5月7日（金）人文研究所資料室（出席者：8名）
報告者：大里浩秋 『越鐸日報』に見る1912年春の紹興
清朝打倒を目指す革命結社の一つである「光復会」の中心となった人物は紹興出身者が多く、紹興を拠点として活動した。彼らが創立した光復会の歴史を振り返りながらその経緯を解明するとともに、『越鐸日報』の辛亥直後の紹興に関する報道記事分から何を読み取れるかを考察した。
 1. 紹興の町
 2. 光復会成立100周年

3. 『越鐸日報』1912年1月3日創刊－27年3月

(2) 第4回研究会 2004年7月21日(金) 人文研究所資料室(出席者:9人)

報告者:谷川雄一郎 「新編中国地方志叢書に見る中国朝鮮族の歴史」

主に延辺に居住する中国朝鮮族に関する研究状況を報告するとともに、『延辺朝鮮族自治州志』に記載されている鉄道網に関する研究課題を提起した。

1. 延辺・朝鮮族の概況

2 『延辺朝鮮族自治州志』について

報告者:吉田隆 「ロカルノ人とチューリッヒの産業発達」

16世紀に始まった宗教改革によってヨーロッパ各地で自己の信仰を保持し、迫害から逃れるためにいわゆる「信仰の亡命者」が多く発生した。今回の報告はロカルノからチューリッヒへ移ってスイスの工業発展の先駆者となった信仰の亡命者についての分析と研究である。

1. ロカルノからの信仰の亡命者

2. 手工業都市チューリッヒと亡命者の受入れ

3. 信仰の亡命者の経済活動

4. ムーラルト家について

(3) 第5回研究会 204年12月10日(金) 人文研究所資料室(出席者:10名)

報告者:小林一美 中華ソヴィエト共和国に於ける「革命と反革命」,「客家と肅清」の関係について(1930-1935)

中国革命は日本に圧倒的な影響力を与え、反戦、反帝運動(学生運動)が起こったが、1980年代以降になると中国社会主義や毛沢東思想の実態が暴露されるようになった。

これにより中国共産党運動、とくに土地革命戦争(第二次国内革命戦争)期における肅清、集団殺戮が明らかになった。1930年代に起きたA B団肅清事件では数万人規模で肅清が行われた。そして被害者の多くの中国共産主義に貢献した江西省、福建省出身の客家であることが判明した。今回の報告では、中央革命根拠地内で1930から1935年に起こった「肅清」の実態と客家との関係を分析し、明らかにした。

報告者:額賀清孝「ゾルゲと第一次世界大戦」

ゾルゲはスパイとして中国の上海や日本の東京を舞台として活躍した。日本では極秘の情報機密をソ連に流していたことから、逮捕され絞首刑となった。ドイツの裕福な家庭に育ったゾルゲが何故このような悲劇的な運命をたどったのかを彼の第一次世界大戦での体験とその意味を中心に考察した。

1. なぜゾルゲなのか

2. ゾルゲのスパイ活動とその歴史的意味

3. ゾルゲの思想的核心と第一次世界大戦

4. 第一次世界大戦の20世紀(戦争と革命の時代)に於ける影響

5. 1920年代に生きた青年,ゾルゲ

(佐々木恵子)

ポストコロニアル・スタディーズの冒険

本研究グループでは、本年度に以下のように国際学会で研究発表を行った。なお、本研究グループは、同研究発表をもって研究活動の締めくくりとし、解散することにした。

<研究発表>

The International Association of Historians of Asia: The 18th Conference,
Academia Sinica, Taipei, Taiwan, December 6-10, 2004

Panel 5-1: Colonial Modernity in Asia: Comparative Perspectives on
Japan, India and the Philippines

Chair: Yoshiko Nagano

Panelists: Chiharu Takenaka (Meiji Gakuin Univ., Japan)

Interpretation of Gandhi in Colonial Modernity

Toru Komma (Kanagawa Univ., Japan)

Latest Trends in Japanese Local History Studies

Yoshiko Nagano (Kanagawa Univ., Japan)

The Philippines and Japan: Their Comparative

Experience of US Occupations

Discussant: Akihiro Matoba (Kanagawa Univ., Japan)

(永野善子)

自然観研究グループ

1. グループ名：自然観研究グループ

2. 講演会の開催

開催日：2004年3月13日（土）

会 場：神奈川大学 17号館 216号室

発表者：川瀬 博（横浜市役所）

演 題：「ゲシュタルトとしての自然 — 都市の自然環境と自然観 —」

開催日：2004年1月26日（水）

会 場：神奈川大学 17号館 216号室

発表者：向 陽一（登山家、探検家）

演 題：「日本の自然はなぜ荒れたのか」

3. 活動内容

研究テーマを「自然観の変遷と展望」と決めて、次のような三分野において順次、講演会を行っている。1) 思想における自然観、2) 文学における自然観、3) 環境学における自然観。

(松本安生)

東アジア比較文化研究会

本研究会が掲げる研究テーマと参加する主要メンバーは、神奈川大学のCOEプログラムの活動にほぼ完璧に吸収されたかたちになったため、人文研の共同研究グループとして存続させていくことがたいへん難しくなっている。神奈川大学の共同研究奨励金をえた「環東シナ海伝承文化の総合的研究」プロジェクトの活動成果をまとめる中で、本共同研究のありかたを再度検討しなおし再出発を期したい。

(山口建治)

横浜研究グループ

1. 横浜研究 — 横浜における多文化共生社会の創出に関する研究

2. 調査・研究会の開催

(1) 第1回

開催日：2004年9月7日（火）～8日（水）

会 場：上大岡ウィリング（横浜市社会福祉協議会研修施設）

テーマ：「メンバー間の問題意識の交流と今年度の活動方針について」

出席者：永野、後藤（政）、大里、寺沢、富谷、後藤（晃）、兼子、福元、横倉

(2) 第2回

開催日：2004年10月13日（水）

会 場：横浜市国際交流協会

テーマ：「外国籍住民に対する横浜市政策のヒアリング」

出席者：永野、尹（亭）、平井、兼子、福元、横倉

(3) 第3回

開催日：2005年1月19日（日）

会 場：17号館基本科目共同研究室

テーマ：「3月下旬の国際シンポジウムについて」

出席者：永野、平井、富谷、大里、孫、福元、横倉、後藤（政）

(4) 第4回

開催日：2005年1月30日（日）

会 場：横浜市国際交流協会小ホール

テーマ：「よこはま国際性豊かなまちづくり市民フォーラム」

出席者：永野、後藤（政）、富谷、後藤（晃）、福元、横倉

3. シンポジウムの開催計画

2005年3月29日、30日に、韓国・中国籍住民の生活実態と出身国である両国の経済・社会状況を中心としたシンポジウムを行う予定である。

4. 活動内容

本年度は共同グループ発足の年であるため、9月に合宿を行って、メンバー間の問題意識の交流を行った。この合宿によって、メンバー間の多様な視点からの問題やテーマを相互理解するとともに、共通する問題意識の確認を行った。また、これにもとづいて、2回のヒアリングやフォーラムの傍聴を行い、横浜市の行政施策及び外国籍住民の生活実態について理解を深めた。3月下旬には、研究活動の一環として、シンポジウムを行う予定である。次年度の調査研究活動の基盤がつくられたと考えている。

（横倉節夫）